

草の根 指導員

金井 英一郎

S A Jには技術章検定という制度がある。5級から始まって1級に至る、俗に言うバッジテストだ。1級をとる頃にはその上をねらいたくなる。指導員検定というのがある。準指、指導員と呼ばれる、あの資格だ。

現在どの位置に居るかで、そのスキーヤーの技術程度を想定することができる。また初対面の場合の位置付けにもなっている。ま、そのクラス程度の技術なんだろうな、という評価だ。

級別テストの場合は、1つ1つの段階を経て上級に移行するわけではなく、5級だった人がご無沙汰で現れて、その検定で4、3を飛ばして2級に合格してしまうことだって有り得る。しきりにスキーに行っていたけど、検定の機会に恵まれなかった、ということだ。

しかし、突然の1級というのは無い。1級を受けるためには、2級を持っていることが前提だから。また非常に特殊な場合を除いて、準指飛ばしの指導員ということもあり得ない。

S A Jでは整然と組まれたこのような検定制度が出来上がっている。これがこのスポーツの伝統であり、歴史であると言えるのだろう。

さて、指導員制度は昭和14年暮、つまり昭和15年シーズンからだが、それから62年も経つから資格者の合計数を言ってもせんないこと、現在実働しているインストラクターの現役は、概ね3万5千人ほどであろうと言われている。

ここで私はいつも考え込んでしまう。この3万5千人はほんとにその資格にふ

さわしい場を得て、好きな自分の道のために活躍しているのであろうか。裏返せば、このように多くの立派な資格者を持つ、冬の代表のスポーツがかくも低迷しているのは、ほんとに不可思議千万ではないか。

活動の原動力であるべき若い準指に聞いて見る。

「準指にとって、一生懸命教えてるかね？」

「やってません。その機会が無いのです。相手が生徒になりたがりません。教わりたくない人を無理に教えようたって」

教えたい教師、教わりたくない生徒。

スキーそのものが面白くないのか？

そんなわけは無い。不況が原因で、またはリストラが怖くてスキーどころでは無いのか？ それもあるだろうけどスキー界にある先生VS生徒の、更に言えば古年兵教官VS初年兵の図式が、当世の世相に合わないのではないか。

スキー低迷のほんとの理由は、こんな所にもあるのでは無いか。

スキーは技術の要素の多いスポーツだ。だからスキーヤーが年配になって体力は年々落ちて、うまいヤツはやっぱりうまい。だから「このスポーツは落下スポーツで息を切ってやる体カスポーツとは違い、中高年に向くスポーツの筆頭なのです」の説を唱える人も少なくない。

技術の習得。これが大事なスポーツなのにビギナーは何でスキー技術をおぼえるのだろう。

「ビデオで十分に研究しました。理論は分かり切っています。でも自分には出来ません」と言う。当たり前だ。ビデオの主演は超ベテランで、高速連続小回りの妙技を披露しているだけだ。時には自慢しているだけというのもある。それに至るまでのプロセスが総て省かれている。これが一番大切なのに。

こうなると転ぶ。転んだらこう起きる。転ばないためにはこうする。その説明が大事なことなのだ。ビデオの高級技術を百回見たってどうにもならぬ。

この人に必要なのはスキーのお兄さん、お姉さん、スキーのオジさんの人脈だ。用具の買い方からゲレンデでの身近な指導まで見てくれる、こんな人脈に恵まれた人は回を重ねて「今度は1級に挑戦」なんてことになる。

ちなみにオレ、パソコンにDVDを組みこんだ。凄いもんだねえ、簡素なシステム、操作、鮮明度、ディスクの容量、値段。

ビデオなんて全然遅れている。

スキーのDVDディスクを探して見た。どこにも見当たらぬ。サッカーなら山ほどある。サーフィンも各種、スノーボードもある。なのにスキーは無い。それだけ人気薄いということか。大先生の言う「スキーは冬のスポーツの王者である」と言うのはウソなのか。

スノーボードのDVDディスクを繰返し丹念に見た。もちろんこのスポーツの宣伝も礼賛もたっぷり盛られている。しかし、いつかこのスポーツの操作が分かってきた。スノボのお兄さんの感覚の説明が馴染み易い。

スキーは固いんだ。簡単に言えば済むことを大学の助教授の論文みたいにしゃべる。教程マニュアルの棒呑み伝達がアカデミックだと勘違いしている。

スキークラブの活性化が叫ばれている。どう活性化する。スキーのお兄さん、お姉さんをとにかく集める。活動の場を与える。すべてがそこから出発する



筆者

金井 英一郎

エッセイスト

日本スキー指導者協会 顧問